

# 曲目紹介

## ブラームス：「大学祝典序曲」

1879年、ブラームスはブレスラウ大学から名誉博士号の称号を授与されることになった。「大学祝典序曲」はそのお礼として、翌年に作曲され、さらに翌々年1月4日に作曲者自身の指揮により初演された。原題にも“Fest-”（「祝典」）という言葉が含まれるが、特に何かの「祝典」に演奏されたわけでもなく、内容もさほど「祝典的」ではない。この曲にはドイツの学生歌が4曲織り込まれているが、いずれも日本では、学生歌としてはあまり知られてはいないようだ。ただし、曲の中程、ファゴットでユーモラスに奏される「新入生の歌」だけは、おそらく皆さんもどこかで聴いた覚えがあるのでは…。

## モーツァルト：交響曲 第38番

1786年に、ウィーンで初演された歌劇「フィガロの結婚」が大当たりし、30歳を迎えたモーツァルトの人気はうなぎ登りとなった。その後、各地で「フィガロ」が上演されると、そのことごとくが大好評を博した。とりわけ、同年12月のプラハ公演ではプラハ市民から熱狂的な支持を得、翌年1月19日に、自作を演奏する演奏会を開くよう招待された。この時、新作交響曲として発表されたのが「プラハ交響曲」の通称で親しまれている交響曲第38番である。

### 第1楽章：

壮麗な開始で序奏部が始まり何度か転調を繰り返す。主部に入ると、弦の各パートが絡み合い、ちよっともやもやした感じで始まるが、すぐにはじけるような管楽器のアンサンブルに切り替わる。この部分では、「フィガロ」の有名なアリア「もう飛ぶまいぞ」が対旋律として聴かれる。

### 第2楽章：

ゆっくりと揺れるようなリズムと滑らかに上昇する半音階が特徴的な旋律で開始される。全体を通じて終始穏やかな調子で進んでいく。

### 第3楽章：

通常の4楽章構成の交響曲では第3楽章としてメヌエット楽章が来るところだが、この曲ではこの後すぐにフィナーレとなり3楽章で終わってしまう。

この楽章では、管楽器だけのアンサンブルが何か所にも挿入され、非常に鮮やかな印象を与える。

なお、蛇足ながら、今宵はモーツァルトの誕生日の前夜にあたるということをつけ加えておく。

## チャイコフスキー：交響曲 第5番

### 第1楽章：

序奏のクラリネットによる暗澹とした旋律は、以降の楽章にも不吉な「運命」のように何度も出現して非常に重要な役割を果たす。暗やみに消えるように序奏が終わると、テンポがあがり民謡風のリズムカルな旋律が登場するが依然曲想は暗いままである。その後音楽が進むと急に雲間から陽が差し込むように暖かく優しい場面になる。しかし、最後はまた暗い雰囲気のまま遠のくようにこの楽章を閉じる。

### 第2楽章：

1888年3月にモスクワ北西クリン市の近郊フロロフスコエに転居したばかりのチャイコフスキーは、この地を非常に気に入っていた。新居は森に囲まれ、周りに家が無く、創作に集中することができたという。第2楽章冒頭の穏やかで憧れに満ちた音楽は、この森での散策から産まれたのかもしれない。しかし、トランペットの最強奏が、2度にわたり凶事を告げるかのように第1楽章の序奏主題を奏し、それまでの平和な雰囲気は無惨に踏みにじられる。最後は溜息のような音形に導かれて名残惜しげな雰囲気を残したまま終わる。

### 第3楽章：

交響曲にワルツの楽章をおいたのはチャイコフスキーにとって初めての試みであるし、当時としても異例のことだった。この楽章は、同じ作曲家によるバレエ音楽に含まれる数々の華やかなワルツと違い、夢想的で儂い印象を与える。コーダでは、例の第1楽章の序奏主題がワルツ風に変形されてシニカルに登場すると、断ち切るような和音が鳴って、まさに夢から覚めたように終わる。

### 第4楽章：

冒頭からいきなり陽に転じた第1楽章の序奏主題が堂々と奏される。これまでの楽章で不吉な影を落としていた「運命」も、最終楽章にきてあっさりと克服されたということになる。このいささか楽観的に過ぎる結末のため、後日作曲家自身はこの曲に対し不満の意を表明した。それにもかかわらず、1888年11月5日のチャイコフスキー自身の指揮による初演は、この楽章の持つすばらしい推進力と輝かしい終結のため、圧倒的な好評をもって迎えられたとのことである。

(桑原 崇)